

日本マクロエンジニアリング学会第 39 回秋季研究大会開催報告

2020 年 11 月 8 日(日)、コロナ禍で新しい事業モデルが模索されている折、日本マクロエンジニアリング学会第 39 回秋季研究大会は Zoom ミーティング方式で開催されました。未だ思わぬトラブルが複数生じますが、リモート会議方式による新しいツールの目途も立ち、発表内容とともに有意義な大会でした。

開会の挨拶

茂木会長より、コロナ禍においてこそ、「持続可能な未来を創造するマクロエンジニアリング」を掲げる本研究大会の意義は大きいと、開会の挨拶がございました。

発表 1「資源回収ステーションにおけるリサイクル協力行動の特徴分析」

劉曉玥；劉庭秀；大窪和明；小山内詩織（東北大学大学院 国際文化研究科）

テレワーク、巣籠生活により、消費性向のみならず、廃棄物の質・量も変化し、廃棄物行政の負担が重くなっています。

青森県の民営の資源回収ステーションにおける利用実態に基づき、回収品目別の利用者特性を分析され、また、利用者のアンケートに基づき、利用者行動のインセンティブに言及の上、資源回収ステーションと廃棄物行政と役割分担を提唱されました。

回収率やコストなど、課題の多い廃棄物行政に対し、改善のきっかけになることが期待されます。

発表 2「持続可能な開発目標達成に向けた環境教育の歴史的変遷と課題-ESD と SDGs 教育を中心に」

小山内詩織；劉庭秀；大窪和明；劉曉玥（東北大学大学院 国際文化研究科）

SDGs の実践や普及が推奨される折、その教育（ESD, Education for Sustainable Development, 持続可能な開発のための教育）の浸透や効果も問われています。

これに対し、小・中・高等学校における ESD の実態として、環境教育指導資料には ESD の直接的記述がないために自信を持って ESD に当たれないことや、教育現場に SDGs が浸透していないことに触れ、実践例の収集と効果評価手法の必要性を訴えられました。

本研究の発展を通じ、SED、更に SDGs の普及や実現につながることが期待されます。

日本マクロエンジニアリング学会 主催：日本マクロエンジニアリング学会（JAMES）
後援：日本工業大学
NPO マクロエンジニアリング研究機構（MREI）

第 39 回秋季研究大会

日本マクロエンジニアリング学会は「持続可能な未来を創造するマクロエンジニアリング」をキャッチフレーズに、「研究・発表・実装を通じ、社会に貢献する」としてあります。

本研究大会では、SDGs の認知度が高まり注目される中、農地流動化、資源リサイクル、可燃ごみの広域処理の環境アセス、および ESD(持続可能な開発のための教育)と SDGs 教育を中心とした環境教育について、マクロエンジニアリングの取組をご提案いたしますので、質疑応答や総合討議を通じ、皆様とご一緒に考察したく存じます。一般の方、会員の皆様の参加をお待ち申し上げます。

日 時 2020 年 11 月 8 日(日) 15:00~17:30

場 所 Web 会議

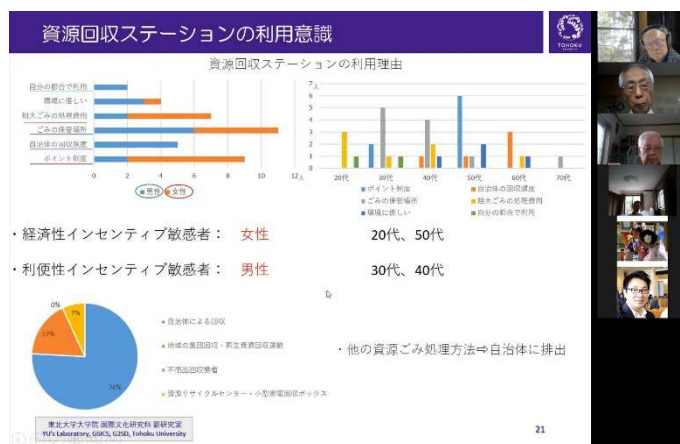
参 加 費 一 般：〇 円（本学会準会員になれる特典あり）
本学会員：〇 円（学生は有効期限内の学生証を提示いただければ無料）

プログラム 一般公開 発表 25 分、質疑 5 分（発表者交代を含む）

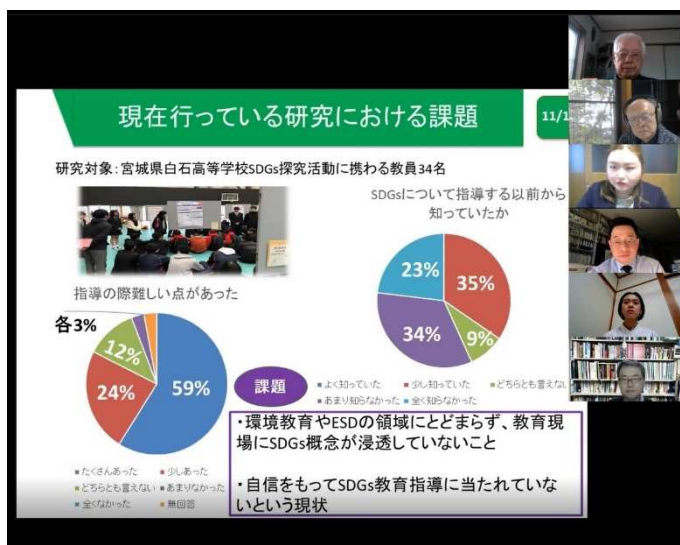
14:55 開会、受付
15:00 開会あいさつ 日本マクロエンジニアリング学会 会長 茂木 創

開会の挨拶（茂木会長）

（参加者は 12 名でしたが、事務局は未だ参加者全員を写す方法、Zoom の使い方が分かっていません）



発表 1「資源回収ステーションにおけるリサイクル協力行動の特徴分析」劉曉玥

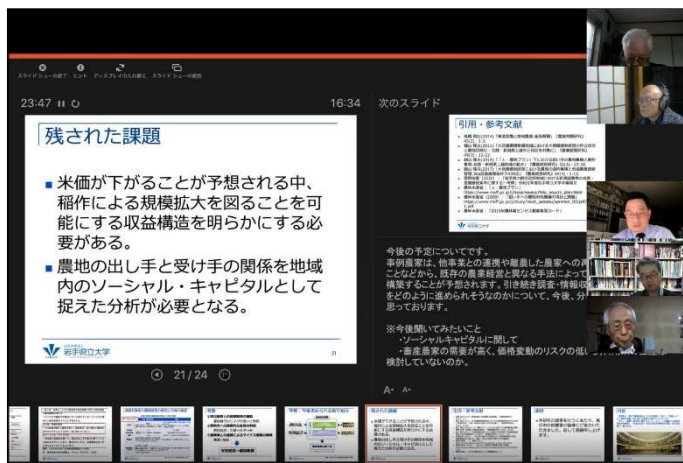


発表 2「持続可能な開発目標達成に向けた環境教育の歴史的変遷と課題-ESD と SDGs 教育を中心に」小山内詩織樹

発表3「都市近郊型農業における農地流動化に関する一考察」新田義修；濱道真唯（岩手県立大学 総合政策学部）

農業の効率化のため、農水省は中心経営体への農地集約化を推奨していますが、様々な理由、環境により、農地集約化は進んでいません。また、就業者の高齢化や減少で担い手の確保が課題になっています。

事例に基づき、農地集約化の要因を分析され、農業担い手不足の解決策を紹介され、今後の取り組みとして、売り先の確保など収益構造の改善とともに、農家との信頼関係を醸成するため、座談会などで意見を共有し、担い手への農地集積を助長することが考えられるとされました。



発表3「都市近郊型農業における農地流動化に関する一考察」新田義修

発表4「可燃ごみの広域処理による環境影響の評価手法に関する研究」戸敷浩介；前田拓真（宮崎大学 地域資源創成学部）

可燃ごみの減少に伴い、ゴミ処理施設の稼働率が低減する中、厚生労働省はゴミ処理の効率化を目指し、広域化計画、すなわち処理施設の集約化を進めています。

本研究では、宮崎県における可燃ごみ収集区域の広域化シナリオごとに、ゴミ収集車の走行距離、燃料消費、および環境負担などのメリット・デメリットを定量評価し、環境負荷と燃料コストを削減するための、ゴミ処理施設の配置、更には廃棄物発電の効果を評価されました。



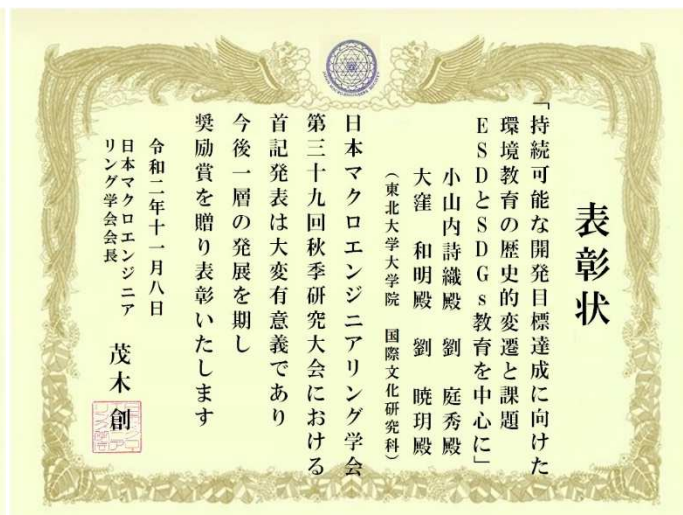
発表4「可燃ごみの広域処理による環境影響の評価手法に関する研究」戸敷浩介

閉会の挨拶・表彰式・総合討論

時間が押したこともあり、角田理事長より閉会の挨拶のあと、表彰式と反省会を兼ねて総合討論を行った。表彰式では、マクロ学会企画委員会の厳正な審査の結果、発表1の劉曉玥さん、発表2の小山内詩織さんに今後の一層の研究発展を期し、奨励賞を贈呈した。総合討論では、今回の発表は地味な研究ながら、コロナ禍こそ「持続可能な未来を創造するマクロエンジニアリング」の出番であるとし、ビールを頂いた。



奨励賞 劉曉玥殿他



奨励賞 小山内詩織殿他